カルメルの小窓（2010 年 11 月）

『三位一体のエリザベトおとめ』

１１月８日、カルメル会では『福者三位一体のエリザベトおとめ』を記念します。彼女は１８８０年にフランスのカンポタボール（ブルージュ）で生まれ、１９０１年にフランスのデジョンに入会し、１９０３年に誓願を立て、１９０６年に帰天しました。彼女も、少し前にフランスのカルメリットとして生きたリジューの聖テレジアと同様に短い生涯でしたが、周囲に福音的メッセージを残し、カルメルの隠れた生活の中でも、教会のために祈りの生活を、

彼女の霊的歩みは、確かに神様が導いたものですが、特に人生の終わりごろに、霊的に開花していきます。特に内的試練と病気の中で、霊魂に住まわれる三位一体の「栄光の賛美」として生き、内在する神秘の中に自身の「地上の天国」、恩恵、教会における使命を見出していきました。

その中で、わたしたちに伝わり続けてきた彼女の黙想ノート、『栄光の賛美』の黙想の一部を紹介します。

「栄光の賛美」の黙想：第一日目より

「わたしはもう何も知らない」（雅歌６：１１）：＜ラテン語引用＞＊

これは雅歌のおとめが愛の密室に導かれた時にうたった歌です。この歌はまた、この黙想の最初の日に「栄光の賛美」である者が絶えず繰り返す歌でもなければならないように思われます。聖主は、まず彼女を底なき深淵の奥底にまでお沈めになります。それは、すでに開始されている永遠、しかし絶えず進行しつつある永遠であるこの世の時から、彼女が果たし始めなければならない、その永遠の務めを教えるためなのです。

「わたしはもう何も知らない」。わたしは、「キリストを知り、キリストの死にかたどった者となり、その苦しみに与かること」（フィリピ３：１０）以外には、もはや何も知らないし、また知ることも望みません。「神は予定した人々を」愛によって十字架につけられた「御子の姿にかたどらせようと予定された」（ローマ８：２９）のです。もしわたしが全く御子の中にとどまり、御子がわたしの中におとどまりになって、この神的な模範に完全に同化されたならば、その時にわたしは自分の永遠の召命を実現することができるでしょう。このためにこそ神は、わたしを「永遠のはじめ」から御子において選んでくださいました。そしてわたしは、三位一体の懐の中に入り込んで、そのご栄光の絶え間ない賛

美となったときに、この召命を「永遠に」続けるでしょう。

「神を見た人は一人もいない。御父のふところにおいでになるおんひとり子の神が、自らこれをお示しになった」（ヨハネ１：１８）と聖ヨハネはいいます。しかし、また聖母のほかにだれもキリストの神秘をきわめた人はいない・・・といえましょう。聖パウロは、しばしば自分に与えられた「知識」について（エフェソ３：４）語っていますが、それにしても、どのような聖人の光明も、聖母の光明に比べればただの暗い陰にしか過ぎません。聖母マリア、ああ、聖母はまことにえもいわれない方です。聖母がそのみ心のうちに秘めてつねに思いめぐらしておられた神秘（ルカ２：１９）、それは、どのような言語もこれを説き明かすことができず、どのような筆もこれを表現することはできませんでした。聖母の小さい子供であるわたしが、聖母の「長子」（コロサイ１：１５）であり、永遠の神のおんひとり子、御父の完全な**ご光栄の賛美**であったその御子の生き写しとなれるように、この恵みの聖母（ロレットの聖母の連祷を参照）が、これからわたしの霊魂を形つくってくださるのです。

＊この「わたしはもう何も知らない」のいう句は、十字架の聖ヨハネの『霊の賛歌』の２６：１４にも関係している。

（この文章は、三位一体のスール・エリザベト『栄光の賛美の黙想』＜ドンボスコ、１９７９＞

を参考にしています。）

（文責：松田浩一）